



基礎部門第1回研究会



近畿支部 兵庫県立考古博物館見学会



関東支部第3回エデュケーター研究会



九州支部研究会

目次

【基礎部門研究部会 平成22年度第1回研究会開催報告】

博物館側から見たミュージアム・リテラシー ～地球における博物館～

東京国立美術館 一條彰子 2

【基礎部門研究部会 平成22年度第2回研究会開催報告】

ミュージアム・リテラシー ～地域と協働する博物館～

齊藤有里加／菅井 薫 4

【支部会だより】

① 関東支部 エデュケーター研究会報告

第1回エデュケーター研究会報告 美術出版社「美術検定」実行委員会事務局 高橋紀子 9

第2回エデュケーター研究会報告 ミュージアム・サービス研究所 山村真紀 10

第3回エデュケーター研究会報告 赤坂有美 11

② 北海道支部 平成22年度研修会開催報告

研究フォーラム 魅力ある自前展示技法を学ぶ ―北海道道南地方の試み―

財団法人北海道開拓の村 中島宏一 13

③ 近畿支部 合同見学会開催報告

兵庫県立考古博物館見学会報告

京都橘大学 大学院 幸山綾子 17

④ 九州支部研究会

九州産業大学美術館 学芸員 松友知香子 21

【インフォメーション】..... 24

基礎部門研究部会 平成22年度 第1回研究会 開催報告

テーマ：博物館側から見たミュージアム・リテラシー ～地域における博物館～
日時：平成22年7月21日（土）13：30～17：00
会場：大妻女子大学生活科学資料館 研修室
報告者：一條彰子（東京国立近代美術館）

平成22年度の第1回基礎部門研究部会は、真家和生教授のご協力により、平成19年に開館したばかりの大妻女子大学生活科学資料館において開催された。

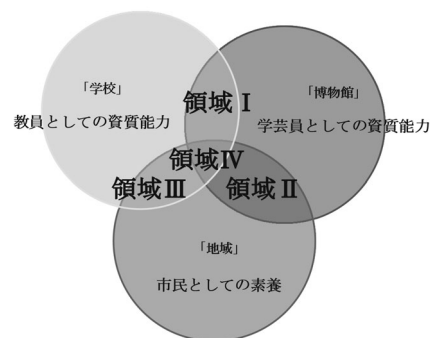
今年の基礎部門研究部会の年間テーマは、「ミュージアム・リテラシー ～地域と協働する博物館」である。新しい博物館法や学芸員養成課程の変化を視野に入れつつ、昨年度に引き続きミュージアム・リテラシーの研究を深めるため、第1回目のテーマを「博物館側から見たミュージアム・リテラシー」とした。

研究部会では、昨年度の学校教育との関係性におけるミュージアム・リテラシーの考察から始まり、地域連携や海外の事例報告、ミュージアム・マネジメント上の提言がなされた。また、小グループに分かれてのワークショップも行われ、それぞれのテーマについて議論が交わされ発表された。当日の資料・記録をもとに、以下にあらましを報告する。

■論点整理

「ミュージアム・リテラシー」をどうとらえるか
小川義和（国立科学博物館）

昨年度の研究会では、第1回＝ミュージアム・リテラシーの視点、第2回＝学校と博物館の連携におけるミュージアム・リテラシー、第3回＝人々と博物館の相互作用としてのミュージアム・リテラシー、というテーマで討議を進めた。その結果、ミュージアム・リテラシーという考え方が館種・領域を超えて共通の土台で目標論について議論できるものであり、利用者と博物館の両サイドから博物館運営と人々の博物館理解の在り方を考えられるのではないかと認識を得た。残された課題としては、個人・社会の要請と博物館経営を、どのように結びつけるのか、また、社会が支える博物館という観点からミュージアム・リテラシーを再考することなどが挙げられよう。



ミュージアム・リテラシーの範囲

領域Ⅰ：教員と学芸員のミュージアム・リテラシー

領域Ⅱ：市民（利用者）と学芸員のミュージアム・リテラシー

領域Ⅲ：市民と教員のリテラシー（学校運営・心理学）

領域Ⅳ：市民としての基本的な資質能力（生きるための力、コミュニケーション等）

■報告：ミュージアム・リテラシー・地域との連携の可能性 —上野の街と連携した「国際博物館の日」記念事業・ミュージアムウィークの事例から—

亀井 修（国立科学博物館）

上野地区では、文化施設（山）と、商業地域（街）が連携した活動を行っている。毎年5月18日、International Council of Museums (ICOM) が制定した国際博物館の日には、文化施設が無料入館を行うとともに、この日を中心として、「街」と「山」とが連携した「上野ミュージアムウィーク国際博物館の日記念事業」を行い、博物館が社会に果たす役割について広くアピールしてきた。

2010/5/8-23に行われた「上野ミュージアムウィーク国際博物館の日記念事業2010」は、「5月の上野はミュージアムと街でお得がいっぱい」というキャッチフレーズで展開された。9つの文化施設で、ガイドツアー、スタンプラリー、セミナー、来館者プレゼント、無料観覧などが行われたほか、文化施設と上野のれん会との連携によるクーポンサービスなど、山と街を行ったりきたりするイベントが仕組みられた。これらの事業のうちに、人々のミュージアムリテラシーが拡がり、また深まるのが期待される。

■報告：地域と協働するためのミュージアム・リテラシーに関する考察

黒岩啓子 (Learning Innovation Network)

広辞苑（第五版）によると、リテラシーとは「①読み書きの能力。識字。②転じてある分野に関する知識・能力」とされている。日本においては②の意味に関する議論が多い。諸外国では多文化・異文化共生社会が急速に進展してきており、自国文化の継承とともに、居住国の文化の受容も必要となっている。このような社会では、上記①の定義である読み書きは、あらゆる学びや生活の基礎を培うのに必要な能力として重要である。また、ミュージアムはインフォーマルな学び、生涯学習の場として多様な人々に利用され、ソーシャル・インクルージョン（社会的包括）を実践するために、地域社会と密接なつながりや連携をすることが一層必要となってきた。

例えばイギリス Lancashire では4つの博物館と学校と作家がパートナーシップを結び、リテラシーに関する授業案を作成し、その一環としてミュージアムを訪問するというプログラムがある。また Guernsey Museum and Art Gallery では、リテラシー・トレイル・アクティビティシートと呼ばれる、美術館の展示物や庭などを題材に、こどもが五感を使って詩や物語を創作できる教材が開発されている。

各ミュージアムの使い方などに関する部分だけでなく、これらの事例のようにリテラシー（読み書き）そのものが博物館教育プログラムの内容・素材にもなり、その必要性と可能性もまだまだあると言える。地域と協働するためのミュージアム・リテラシーを考える時、地域社会の実態とニーズをまず把握し、プログラムを開発し、それを実施していくシステムを構築することが必要である。そのためには使命や目的を関係者と共有し、パートナーシップを形成することが大切である。

■提言：ミュージアム・リテラシーを涵養する地域連携を主眼としたミュージアム・マネジメントの課題

奥本素子 (総合研究大学院大学)

嘉村哲郎 (東京藝術大学)、平井宏典 (共栄大学)

ミュージアム・マネジメントの分野において「地域連携」が注目を集めている背景に、日本のミュージアムが直面する以下2つの要因がある。

1. 社会的支持基盤の脆弱性——日本ではミュージアムの経営特殊性が理解されておらず、利用者た

る市民に対しても効果的にミュージアムをアピールすることができていない。

2. 都市機能としての期待の高まり——文化政策・都市計画・まちづくり・観光等の分野からは、ミュージアムの役割に対して期待が高まっている。

これらは館単独というよりも当該地域全体の問題であり、「地域連携」が求められる要因として重要な位置づけにある。これらのことから「地域連携を主眼としたミュージアム・マネジメントの実践」は最重要課題であるが、適切に対応されていない。このことは、日本のミュージアム・マネジメントの主眼が、顧客（来館者）重視であり、いかにオペレーションの精度を高めるのかという問題に終始しているからであると考えられる。

ミュージアム・マネジメントはその職務や範囲等から①オペレーション・レベル（良い企画展、顧客満足度）、②マネジメント・レベル（マーケティング等）、③ガバナンス・レベル（制度等）、④社会体制レベル（寄付、社会認識等）の4つの階層に分類することができる（上山・稲葉）。日本のミュージアムの多くが①（②を含む場合もある）を重視した経営をしているが、「地域連携」において求められる階層はむしろ②～④である。この点において実際のミュージアムの経営（①、②）と今日的課題（②、③、④）の間にギャップがあり、地域連携が促進しない要因となっている。

「地域連携」を促進するためにはパラダイムの転換が必要であり、以下の3つのポイントを提言する。

1. 対象の拡大「利用者⇒地域（より広い視野で対象を捉える）」
2. 視点の拡大「ニーズ⇒シーズ（顕在化したニーズだけではなく地域で種を育てる）」
3. 戦略の拡大「内部志向的戦略⇒外部志向的戦略（連携や外部資源の獲得）」

■ワークショップ：ミュージアム・リテラシーと地域連携に関するマネジメント要素の導出

奥本素子、嘉村哲郎、平井宏典

【ワークショップのテーマ】

「博物館における地域連携」

【手法】

CoMMS (Cognitive Map of Museum Studies: 博物館学概念地図) の手法を使って、地域連携と博物館について概念を整理する。60分。

【手順】

I ① 5～6 人で 1 チームになる ② 大概念セットを選ぶ 	III ④ ポストイットに大概念に関連する概念、理論、ステークホルダー等のキーワードを書いていく 
II ③ 大概念を模造紙に配置する 	IV ⑤ 大概念の近くに関連キーワードを貼り付ける 
⑥ 最後に博物館と地域連携について班で意見をまとめる	



■まとめ：

地域と連携したミュージアム・リテラシーとは
高安礼士（全国科学博物館振興財団）

博物館は、地域のさまざまな機関のネットワークの中にある。また、新しい「博物館の望ましい基準」（現在検討中）においては、地域との連携は「幅広く」考えることが提言される。

博物館職員に求められる「地域連携リテラシー」とは、次の 3 点といえるのではないかな。

- ① ミュージアムの理念の構築力
- ② フレームワークの構築力と異文化理解
- ③ 事業マネジメント技術（資金、目標、人材、時間、事業コントロール、他）

日本の博物館の多様性に基づく「地域連携力」が必要ではないかな。

最後に、当日発表された内容をもとに全員でディスカッションが行われ、閉会となった。

基礎部門研究部会 平成22年度 第2回研究会 開催報告

テーマ：ミュージアム・リテラシー ～地域と協働する博物館～

日時：平成22年11月27日（土）13：30～17：00

会場：戸田市立郷土博物館 講座室

参加人数：32名（発表者・関係者を含む）

報告者：齊藤有里加 菅井薫

1. 背景

基礎部門ではミュージアム・マネジメントに関する基礎的な理論と実践理論の構築を目指している。平成22年度は昨年度の学校教育との関係性におけるミュージアム・リテラシーの考察の成果をより広い視野で捉え、生涯学習の観点から市民の地域参画力を高め、地域を巻き込んだミュージアム・リテラシーについて議論を行っている。

第2回は、「ミュージアム・リテラシー～地域と協働する博物館～」と題し実施した。

2. 各発表の報告

以下、第2回研究会「ミュージアム・リテラシー～地域と協働する博物館～」の内容を報告する。

論点整理

基礎部門研究部会長の小川義和氏（国立科学博物館）から、本年度の第1回研究会の内容について報告が行われた。その上で、個人・社会の要請と博物館の経営という視点から、残された課題が次のように示された。

- ・利用者は博物館に何を期待し、訪問の結果何を持って帰るか。
- ・博物館は利用者に対し何を期待し、どうなってもらいたいと考えるべきなのか。
- ・ミュージアム・リテラシー：人々が博物館を理解し、博物館を主体的に活用することができるか＋博物館側が人々の博物館活用を促進するために博物館としてどのような考えと取り組みをしているか。
- ・社会に根ざした、社会が支える博物館という観点からミュージアム・リテラシーを再考する。

提言：ミュージアムの教育普及活動と地域文化資源—社会教育という視点から—

端山聡子氏（平塚市教育委員会社会教育課）からは、平塚市美術館と平塚市中央公民館での活動経験にもとづいて、(1) 社会教育と生涯学習に関する実践とその特徴、(2) 教育普及と調査研究の事例からミュージアムの活動を考える、(3) 調査研究と教育普及の関係の振り返り、(4) ミュージアムでの学習と社会教育での学習との共通性、について以下の提言が行われた。

(1) 社会教育と生涯学習に関する実践とその特徴

美術館から社会教育課に異動し、市内の公民館事業の活性化のため、ワークショップを用いた職員研修を仕事として行うようになった。そこで初めて、社会教育では、参加型の学習や相互学習が行われていることを知った。例えば、公民館では、「地域課題」「生活課題」「現代的課題」などの地域・現代に固有の課題を事業化し、応えていく。公民館での活動の特徴は、第1に、学習者に主体性があり、能動的で継続性があること。第2に、公民館活動で学んだことを地域に還元するという長期的な目標がある。

(2) 教育普及と調査研究の事例からミュージアムの活動を考える

ミュージアムの資源には、作品・情報・資料・個々の様々な参加者／利用者の能力やネットワークがある。ミュージアムの活動の特徴は、上述の資源を用いた活動に循環が働く点にある。具体的には、①蓄積した資源を使った活動、②①の活動を使って活動した蓄積、③②の蓄積した資源が使われる、というサイクルである。

ミュージアムでの学びには、「享受する楽しみ」と「構築する楽しみ」の2つがあると考えている。前者は展示を見て何かを思うような、受けとめる楽しみであり、後者は調査・収集の積み重ねにより理解が開けていくような学びのあり方である。特に「構築する楽しみ」は、利用者がミュージアムの資源を顕

在化させ社会へと伝達する回路となるのではないかと考えている。「構築する楽しみ」の具体例には、地域の作家の情報を調べ、データの蓄積・公開整備を行う活動があり、「市民による『知のインフラ整備』」と呼んでいる。

(3) 調査研究と教育普及の関係の振り返り

美術館では、作品にあらかじめ価値があり、価値を伝える場所である。そのため、利用者から価値を新しく創造することが難しい。人々が調査研究し、価値を発掘した地域資料を美術館と関連させていけるのか、というのは美術館側に大きな発想転換が無いと無理なのではないかと思っている。同様に、地域の博物館でも、学芸員自身の研究テーマと館の研究の不一致をどう乗り越えていくかが大切なのではないかと。

(4) ミュージアムでの学習と社会教育との共通性

博物館教育は、学校教育との比較の中でよく語られるが、社会教育の中の公民館の学習とはどれくらい比較されてきたのかと疑問に思った。社会教育的な視点でミュージアムを見ると、平塚市博物館は社会教育的な活動であることに気づいた。サークル活動で様々なグループがあり、それを学芸員が指導して、発表（還元）の場があり、公民館の活動モデルと非常に似ている。自分の活動も振り返ると、社会教育的であると思う。

公民館で行われている学習活動と地域との関係、博物館で行われている学習や教育、双方の共通性と違いを比較して考えていくと新しい発見があるのではないだろうか。

質疑応答では、公民館にも研究機能が必要なのではないかという意見があった。それに対して、端山氏は、公民館では調査研究を含めた方法論が少なく、調査研究への認識の高い博物館と相互に交流を持つことで、豊かな研究・教育活動が生まれる可能性があるのではないかと指摘した。

報告：教員のミュージアムリテラシーに関する調査研究報告

佐々木秀彦氏（東京都美術館）・齊藤有里加（くにたち郷土文化館）・菅井薫（お茶の水女子大学）からは、「科学系博物館の学校利用促進方策—教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発—」の成果について報告が行われた。報告は以下の3点に分けて、進められた。

(1) ミュージアムリテラシーとは何か

ミュージアムリテラシーの基本的理解として、利

用者、博物館のどちらか一方が行動・実践することによって成立するものではないことをおさえる必要がある。リテラシーを定義する側は、自らの権威性や意図の存在に自覚的でなければならない。つまり、行為の結果（「～ができること」）だけではなく、獲得する行為のプロセスに着目していくことが重要である。上記プログラム開発の調査報告書では、ミュージアムリテラシーを次のように定義した。

「何らかのコミュニティに属するミュージアムと教員／利用者が、(1) 相互のルール・役割・道具（資源となるものごとや考え方）の内実を理解し、互いに働きかけを行うことであり、(2) それぞれの活動の境界を越えた働きかけを通じて育まれ、蓄積されていく活動のあり方・考え方の形態である」。

(2) 教員のミュージアムリテラシーの構成要素

まず、教員のミュージアムリテラシーを考えるにあたって、学校と博物館双方の学びの違い（表1参照）を理解した上で、相互の「連携」が行われるべきである。

表1 学校の学びと博物館の学び

	学校	博物館
形式	定型的・固定的	非定型的・柔軟
内容	共通・一般的	多様・専門的
対象	集団	個人・グループ
目的	標準的な知識の獲得	興味関心の充足
目標	正答を得る	知的な探求
教材	おもに教科書	おもに収蔵品・情報
動機	他律的	自発的
評価	必須	必須ではない

（佐々木氏の発表資料より転載）

「博学連携」には3つの方向性がある。1つ目は、学校の学びを博物館が支援する形である。学校による博物館利用のもっとも効果的な方法であり、博物館を活用して教科の学習を充実させることが目的となる。2つ目は、博物館での学びを学校という場を通して伝える形である。具体例には、校外学習や遠足での博物館見学、職場体験が挙げられる。3つ目は、学校と博物館が互いの特性を活かし新たな学びをつくる形である。上述の2つの方向性の違いを認識した上で、互いの特性を活かした新たな学びの場を作り出せるのではないだろうか。例えば、総合的な学習や図工・美術における鑑賞教育に博物館の学びの要素を取り入れることができる。連携を超えた「融合」といえる領域かもしれない。

(3) 教育のミュージアムリテラシーに関する調査研究報告書の概要

教員研修は、博物館と教員の数少ない交流の場であるが、実施している館は少ないという背景がある。そこで、実際に、教員研修を実施している博物館の実態についてインタビュー調査を行った。今回の報告では、主に多摩地域及び近隣地域の博物館での取組みが紹介された。

・江戸東京たてもの園

学校と文化施設をつなぐ「動くフォーラム」文化施設体験ツアーとして、夏休みの教員へ各施設をめぐり教育普及の取り組みを体験する研修を実施。都内の文化施設の一つとして、民具の体験をしてもらう体験をおこなっている。

・入間市博物館

校長先生、初任者など、それぞれに博物館を知ってもらうための研修を実施。初任者施設体験研修では、資料整理など博物館の業務の体験実習を行っていた。また資料の目玉である「お茶」を取り上げた研修を行い、郷土を学ぶ授業カリキュラムの中での博物館活用を促している。

・多摩六都科学館

学校の先生自身が、理科の実験に慣れておらず、苦手意識を持っていることが多いため、各教科に活かせる実験を、東京学芸大の先生と連携して実施している。

・府中市立美術館

教員が実際に美術館で鑑賞教育を行う事を目的に、美術館という空間を活用した「鑑賞」や「表現」に関する研修を実施している。

また、博物館での教員研修を行う現場の声が紹介された。

・まずは、教員に博物館に親しみ、楽しんでもらう事。

・研修を通じて、地域の先生同士の情報の交換や博物館と教員のパイプ作りに役立てたい。

・毎年団体対応している学校でも、昨年打ち合わせした先生が今年も来るとは限らず、博物館と学校のパイプを構築するのが難しい。

・実際の団体対応の中には、博物館のイメージがつかめないまま当日初来館する教員も多い。

・博物館が楽しい場所だと実感してもらう研修なのに、疲労した教員が事務的に参加をする雰囲気になっては本末転倒になってしまう。

最後に、博物館はそれぞれ強みや特色があり、博物館の資源のイメージを共有し、共感するところか

らリテラシーの一步が始まると提言された。

報告：戸田市立郷土博物館の取り組み（博学連携事業を中心に）

本研究会の開催にご尽力頂いた、山崎あさぎ氏・香林勉氏（戸田市立郷土博物館）からは、特に学校の博物館利用に焦点を当てた報告が行われた。

（1）博物館概要

戸田市立郷土博物館は、図書館との複合施設であり、図書館・郷土博物館館長は、図書館・文書館・博物館・自然学習施設の4つの施設を所掌。複合施設ならではの調べ学習対応に特化。特に、指導主事を館内に配置した平成3年度以降に積極的に取り組んでいる。小学校3年又は4年の社会科、6年生の社会科、小学校4年生の理科の単元において、小学校から本館（郷土博物館）と分館（彩湖自然センター）まで貸切バスを利用（教育委員会予算計上）して、小学校時代に3回博物館に足を運ぶシステムとなっている。活用検討委員会を組織し、学芸員と教職員による積極的な連携、協力を図っている。

（2）学校来館型支援

郷土博物館では、資料に触れたり体験したりする機会を設ける。小学6年生の歴史学習では、市内から発掘された土器に実際に触れたり火おこしの体験をする。小学3・4年生の郷土学習では、農具の体験やむかしの道具調べを実施する。分館では、小学4年生理科の単元「季節と生物」を支援。バードウォッチング、水辺の生き物観察、昆虫の観察、植物の観察を実施。その手順は申し込みを受け、時間を調整し、事前打ち合わせ会を開催する。授業目的の確認、事前指導のポイント、進行の確認、道具の事前準備依頼、バス手配の確認を行う。教員側は3日前までに事業計画書を指導主事に提出し学芸員へ。

（3）出張授業支援

通年で行う出張活動小学校5年生1年間のコメ作りに対応。農具体験、脱穀、わら利用の3回において学芸員が出向き、学芸員が対応した。また、なわないのレクチャーは133人を4人の学芸員で教えるため、教員に当日までに技術を学んでもらった。

（4）道具の貸し出し

館蔵の貸し出しリスト一覧を〈検討委員と学芸員で選定〉使える学年や教科に合わせて作成している。用水に関するもの、戦争に関するもの、写真パネル（東京オリンピックに関するもの）の要望が多い。

（5）活用検討組織について

委員構成は小学校教諭4名及び中学校教諭2名＋学芸員。年間4回から5回館へ集まり授業、年度末

の研修の発表などを行う。事例集は数年ごと、ワークブックは毎年改訂を行っている。また、研修会について博学連携を考える研修会を実施。

（6）学校教員のための研修会

5年目研修では収蔵庫などのバックヤード見学、資料の紹介。授業に資料を使う認識を新たに持ってもらふ。グループワークとして、どのような授業ができるか計画してもらふプログラムを実施。教科特化研修会では、授業を深めた内容を実施。新任施設体験研修においては、博物館を使う有効性について説明する時間を設け、教員にとって博物館が身近になる事を促している。

（7）今後の課題

指導主事の存在は大きい。今後は中学生の対応が課題。実物も歴史の資料になると、文書資料が多くなり、開拓が難しい。学校型の進め方の把握など、連携の深化についても課題が残る。出前授業などの対応もあるが、人員の不足もあり、ボランティアの派遣なども視野に入れながら活動を検討している。

質疑応答では、以下のようなやり取りが行われた。

Q：博物館の数と、学校の数に対応はおおよそ1:10とみている。この数が2倍などになった時に活動に無理は生じないか？

A：博物館来館に関してはある程度のパターンがあり、対応ができると思う。出前授業が増えてくると負担が心配。受け入れは増やしていきたいが、人員としては今が精一杯。土日のシフトも組んでいるので、綱渡りのなやりくりもある。

Q：学校の学びの支援の体制や仕組みも充実している、親しんでもらう取り組みもなされている。ミュージアムの面白さを伝える活動を館が行う事の視点（リテラシー面）をどのように考えるか？

A：博物館事業の際に、講座の案内などを積極的に行い、博物館を学校だけでなく日常の中で利用してもらおうようにしている。

ワールドカフェ：これからの地域と博物館

一條彰子氏（東京国立近代美術館）のファシリテーションにより、今回の研究会テーマ「利用者側から見たミュージアム・リテラシー～地域のための博物館～」をもとにワールドカフェの手法を用いた、発表者、参加者全員によるワークショップが行われた。

（1）ワールドカフェの進め方

ワールドカフェとは、メンバーの組み合わせを変えながら、4、5名のグループで話し合いを続ける

ことによって、参加者全員が話し合っているような効果が得られるものである。今回は約20分の対話を3ラウンド実施した。

ラウンド1「地域住民にとって、博物館はどのような存在であり／あってほしいですか」

ラウンド2「博物館にとって、地域住民はどのような存在であり／あってほしいですか」

ラウンド3「これからの博物館と地域との関係とは」

ラウンド2では、ルールに基づいて話し合う相手がシャッフルされる。ラウンド1で話し合った班員は一人のホストを残して他の班へ拡散し、ラウンド1で話し合ったアイデアを述べる。各ホストはラウンド1で話し合われた内容を他班からやってきた人へ説明し、対話をつなげる。ラウンド3では、もといいた班へ立ち戻り、それぞれが聞いてきたことやアイデアを紹介し合い、対話を深める。ラウンド終了後は、全体セッションを行い、抽出された知見を参加者全員で共有した。また各個人の感想や意見はポストイットの形でまとめられ、掲示によって共有された。

(2) 全体セッション：各テーブルでの発言・アイデアの披露

・テーブル1

21世紀型ミュージアムは今を見せる観光としての在り方を追求すべき。地域と博物館の関係を考えるのに、観光という視点を入れる。地域資源を扱う時には、外にある基準が分かっていると、地域を自覚できないのではないか？「観光という視点」今の博物館は地域の人よりも、外部からの一見さんが多いのではないか？今後はその地域の特徴を自覚したうえで、外の人にどう見せるかという観点が必要。博物館が見せるべきであるべきかマネジメントが重要ではないか？一方、マネジメントに偏るのも危ないのではないか？双方の意見が出た。

・テーブル2

「観光と地元のための博物館」博物館の2面性をうまく活用していく事が有効。ただそのためには、有る程度適正規模があるのではないか？という事が議論になった。今回発表された戸田市や、平塚など、うまくいっている所はある程度規模があるのではないか？（同じやり方では）うまくいかないところもある。一方「地元の人は、地域の博物館を支える」その支え方の問題で、どういう風に支えるのか、地元の人に対して、博物館が何をどういう風に支えてほしいのか、明確にしなくてはならない。一見さんではなくて、地域の人へ発信していかないといけない。また、他方ではお弁当を持って昼休みにふらっ

と入ってご飯を食べているなど、ゆったり地元の人にとって楽しめる存在であることが大事なのではないか？

・テーブル3

地元の人は実は地元の素晴らしさに気付いていないのではないか？第三者、当事者ではなくて、中間的な人がうまく新しいミュージアムに係るコアになってもらえるといいのではないかと感想を持った。→リエゾン？

・テーブル4

市民にとって博物館の有用性って何だろうか？いろいろなモノがあって、知識があって、研究しているいろいろなことが分かる。一方で、地域市民の明日の課題の解決につながるような場所として機能したら良いのではないかと。しかし、こういった活動について、博物館だけでやるには限界があって、学芸員が背負いきれるものではない。地域の人に応援してもらわないといけない。パートナーシップを作らなくてはならないが、「ミッション」という博物館のそれぞれの目的が、地域のひととうまく作れているのか？ばらばらの方を見ていないか？博物館のミッションを議論しながら作っていくと、いいパートナーシップができるのではないかと感じた。

・テーブル5

キーワードとして、「新住民」「元住民」との関係。もともと住んできた人と、新しくきた人をつなぐ役割としての博物館の機能だったりする。どんな地域なのか、地域のアイデンティティを発見する施設であってほしい。

一條氏のファシリテーションにより、終始和やかな雰囲気で行われた。カフェ形式では時にユーモアもある参加者の体験談や、例え話が多く挙がり情報を共有することができた。個人によって描かれたメモは掲示され、全員での共有が行われた。



ワールドカフェの様子

支部だより

①関東支部

エデュケーター研究会報告

第1回 エデュケーター研究会報告



日 時：2010年7月8日（木）19時～

場 所：文化庁第2会議室（旧文部省庁舎2階）

報 告：美術出版社「美術検定」実行委員会
事務局 高橋 紀子

各博物館における教育普及担当専門職員＝エデュケーターの配置促進や社会的地位の向上に資する観点から、日本ミュージアム・マネジメント学会関東支部では「エデュケーター研究会」を発足し、この度第1回研究会が行われた。

最初は10名程度の小さな会になるだろうと主催者は予想していたように、50名以上の参加者が集まり、エデュケーターへの関心の高さが伺えた。

会は、大阪市立自然史博物館、琵琶湖博物館を経て現在三重県新博物館に勤務される布谷知夫氏による、現場での豊富な経験を通して培った教育理念を元に、ミュージアムエデュケーターを博物館にどう位置づけるか、という講演から始まった。

まず日本の博物館の特徴として、博物館法第2条にある3つの定義、収集および保管・展示・研究、これらすべての業務を学芸員が横断的に遂行していることを取り上げ、それらの業務が完全分業化されている欧米と比較してプラス面とマイナス面が挙げられた。プラス面としては、業務を横断することによって利用者によりサービスが提供できる、例えば

博物館が所有する資料をよく知る学芸員が直接来館者に提供できること、マイナス面としては、それらの業務に対し慢性的に予算・人力的に不足していることなどが指摘された。

また、博物館の社会的な役割が時代の変化と共に変わってきたことで、その定義にも変化が起こっていることも挙げられた。例えば、かつては資料収集、活用の機関として機能していた博物館は、地域の資料を収集、研究する地域のための情報センターとなり、現在では地域の人がその地域について学ぶ場となり、地域を考える力へとなっているという。その結果来館者も多様化し、そうしたさまざまな利用者に対応すべく、いま博物館では3つの定義に加え、教育もその定義に位置付けるべきと指摘された。

次に、博物館で行う教育活動の特徴として、布谷氏の前職先である琵琶湖博物館での経験談から、博物館教育とは双方向的、能動的な教育活動の場であることが説明された。博物館の展示室は、かつては一方的な情報提供の場だったが、“何かが起こる”ことを誘発する双方向・能動的な学習の場となり、やがて一人一人が展示室から自分自身で学び、自らの“もの”とする機能を果たすようになったという。例えば、地域のための博物館として、展示室はその地域資源の情報発信の場としての機能を持ち、自分で調査研究することで地域を再発見し地域を変える力になった、琵琶湖博物館のミッションである「地域のためのミュージアム」が研究的教育的視点において達成されている事例が紹介された。

そうした博物館での教育活動の経験を通し、日本が手本にしてきたアメリカ、イギリスでの博物館におけるエデュケーターの現在の状況を鑑みて、では現実的に日本ではどのようにしたら博物館での教育活動が展開できるか、布谷氏自身の意見が述べられた。それは、現状の学芸員の中から博物館教育の専門職員を育成し、その教育担当学芸員が研究系学芸員と連携体制をとり、全体の教育事業が展開されることだという。そうしたエデュケーターとキュレー

ターの対等的な関係により、よりよい博物館教育活動を見出せるのではと指摘された。

その後、布谷氏の講演内容に対し質疑応答がなされた。まずは、博物館にエデュケーターがなぜ必要になってきたかという質問については、博物館の来館者が多様化しさまざまな人に対応できる研究員が必要になってきたという回答があった。他には、どのようにしたら博物館教育の専門学芸員を育成できるのか、といった質問に対しては、現場で培ってきた、教育に関心のある学芸員や教育学を学んできた学芸員、また海外でミュージアムエデュケーションを学んできた若い学芸員が、博物館教育という研究を確立していけばよいのではという回答だった。その件については、出席者からも、教育学系学芸員は専門の研究分野に弱いというキュレーターの下立場としてではなく、利用者の目線を持つことを強みにし、来館者に近い存在として業務に従事すればよいのではという意見もあった。

そうした中で、では博物館教育とは何かといった話題に広がっていった。博物館教育は学問的な学芸と、来館者とのやりとりの中で見出す学芸の2つの要素があることなどや、調査研究するキュレーターと言われる研究系学芸員と人を研究するエデュケーターである教育学系学芸員が同等の立場に立ち、それぞれの博物館の理念を遂行することが理想であるが、そうした遂行は実際その館内のみで完結できるのかどうか、などさまざまな意見が交わされた。また、研究系学芸員も専門分野があり、その専門性を広げようとしているという点では教育的視点があるものの、博物館がひとりひとりの利用者にとってどういう役割を果たしていけるのか、そして教育学系学芸員は利用者の立場にたって博物館活動全体を見渡していく役割があるのではないかと、といった意見も挙げられた。

エデュケーターを巡る議論はまだまだ始まったばかりだが、こうして博物館内外の関係者が集まって議論を重ねたこと自体がすでに博物館教育を確立する第一歩になったのではないと思う。よりよい博物館利用のためにも、今後この研究会の動向を追い続けていきたい。

第2回 エデュケーター研究会報告



日 時：2010年9月6日（月）17時～

場 所：国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）

報 告：ミュージアム・サービス研究所 山村 真紀

第2回関東支部エデュケーター研究会は、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）において行われた。発表は、「歴史展示と教育」と題し、歴史研究系教授の小島道裕氏に最初にご講演いただき、次に「博物館の学びから文化をつくる」を情報資料研究系助教の佐藤優香氏よりご講演いただいた。

(1)「歴史展示と教育」 小島 道裕 氏

まず、小島氏による「歴史展示と教育」の発表では、歴史は実態ではなく「歴史像」とあるという前提の共有からスタートした。特に個人によって異なる見方がありうる歴史という認識をもとに、「歴博はただ、人々が自分の歴史像をえがくための産婆役であることにこそ、積極的な意味がある」という歴博初代館長、井上光貞氏の言葉が紹介された。

歴史像を描くための産婆役とはどういうことであろうか。従来の学芸員が展示によって歴史像を観客に提示するという一方方向でのコミュニケーションモデルは不可である。なぜなら歴史像の押し付けとなり、また「正しい歴史を学ぶ」という立場をとるなら、歴史博物館は存在しえないと小島氏は指摘した。

では産婆役としてのモデルはというと、観客が学芸員と同じ位置に立つモデルが必要であるという。つまり、歴史展示とは各々の歴史像をつくるための素材であり、「一緒に考える」場である。博物館に求められるのは、それをどのように支援するかという視点から、改めて歴博の展示コンセプトの変化が紹介された。

1983年の開館当初からはじまる第1期展示は象徴主義であり、各時代の「典型的な」社会の在り方の一般的なイメージをつくることを目的とされていた。その後、1995年以降現在に至るまでの第2期展示では、機能主義として、資料の具体的な意味を読み解き、特定の遺跡・年代等に基づく展示が行われるようになった。そして展示だけではなくプログラムとしての工夫も展開されるようになり、コートールド美術館やブリティッシュミュージアム、ヴィクトリア&アルバード美術館等のワークシートを参考として、「れきはく親子クイズ」、「現在のれきはくクイズ」が登場した。

これらのプログラムには、年齢による発達の差、つまり「過去」を認識できるかどうかや、前提となる歴史学習や漢字といった知識について留意されている。こうした実際の歴博における取組事例も合わせて紹介され、より具体的な内容については、次の佐藤氏の発表に引き継がれた。

(2)「博物館の学びから文化をつくる」

佐藤 優香 氏

「楽しく豊かな学びのための環境をデザインしたい」そう冒頭で述べられた佐藤氏は、創造の過程に価値の創造と学びがあると続けた。歴史系博物館における学びとして、小島氏と同じく初代井上館長の言葉を紹介され、また合わせて国立民族学博物館初代館長である梅棹忠夫氏の「わたしはこの博物館の仕事に取り掛かるにあたって考えたのは、イメージーションの世界をつくりたい」という言葉が紹介された。

社会科、特に歴史科目は勉強の成果が見えにくく、暗記科目としてとらえがちである。しかし美術家の柴川敏之氏が「歴史はアートと同じく『創造的な科目』と考えるようになった」というように、歴史のストーリーを一人一人が組み立て、歴史的存在としての自分たちを改めて見つめなおす機会として、歴博と学校との連携活動が紹介された。

事前学習としての博物館利用では、歴博で洛中洛外図屏風の鑑賞が行われ、次に修学旅行ではフィールドワークとしての京都散策で実体験をする。そして学校に戻って自分の旅行を表現するミニ屏風づくりが、事後学習であり表現としての創造活動として位置付けられている。これらの中学生の活動の様子は写真や動画によって紹介され、参加した中学生た

ちの生き生きとした表情を見ることができた。

例えば、生徒たちは、修学旅行先である京都のイメージをそれぞれ持っているが、博物館へ行くことによって資料と自分（の興味）がつながり、京都の見方の指針を持つことができた様子がうかがえた。

これらの経験から、博物館教育とは何をデザインするのかという問いを自ら発せられた佐藤氏は「展示をきっかけにやりとりしながらじっくり観てたのしむ」「博物館の学びはコミュニケーションのデザイン」そして「人と人のコミュニケーションに物が介在する!」という回答を提示された。

来館者は自分なりの関わり方を選択したい。そのためのミュージアムリテラシーを育む学びのデザインには、様々な可能性があるが、展示を一つの表現として「ふでばこてらん会」のワークショップが最後に紹介された。その中で、3つの気づきがデザインされているのだが、最後に紹介したい。1つめは、私たちが日々歴史をつくっていることの気づき。2つ目は、物にはストーリーがあることへの気づき。そして、3つ目は展示とは解釈であり同じ資料でも企画者によりいかようにも変化するという気づきの3点である。

※小島氏と佐藤氏の発表時のデーターは、許可をいただき、下記JMMA関東支部のブログにてすべて閲覧可能です。ご興味のある方は、アクセス下さい。

JMMA関東支部ブログ

<http://jmmakanto.blogspot.com/>

第3回 エducーター研究会報告



日 時：2010年9月20日（祝）17時半～
場 所：神奈川県立近代美術館 葉山館講堂
（神奈川県葉山町）
報 告：赤坂 有美

【報告内容】

学校教育との継続した連携による鑑賞教育で実績のある稲庭氏が「価値観の交換の場としての美術館歴史と現在」と題して報告を行った。

今回の報告では、鑑賞者自らの主体的な価値の創造を促す場として神奈川県立近代美術館が機能してきた開館以来の歴史をふまえ、学校との連携による鑑賞教育の実践を深めゆく現在を通じて、作品との個人的対話にとどまらず、他者との情報共有など社会的対話をつなぐ回路としての同館の機能に着目し、同館の使命を鑑賞教育の実績からとらえる見方が示された。

具体的にはまず、美術館は、文化資源・知的資源の保持の場であり、作品と人々との回路を増やし、利用者の主体的な価値形成を促進する場である、との位置づけがなされた。

そして、美術館での教育活動の対象としてはマスからOne to Oneへ、さらに多様な人々が気軽に訪れられる機会と深く関わることでできる機会、双方を行き来できるような、多様なドアを美術館が常に用意しておくことが大切である点が強調された。さらにそういった機会を作るために、美術館（職員）とそこに関わるひとびととが、ともに協力し合える構造をつくること、潜在的にもっているそれぞれの力を高めることの2点がとくに求められているという。その手段として、現状ではたとえば作家・文化人・大学の教員・研修センターの職員、その他多様な人々に美術館活動の周知を試みている。これがのちに紹介された配布資料（蓮池じゃぼん、あの色／あの音／あの光、美術館はぼくらの宝箱—子どもと楽しむためのガイドブック—など）の活動紹介へとつながっていった。

主体的な思考を生む観賞方法のデザインとして、個人的対話と社会的対話を繰り返すことができるよう、「見る→考える→話す→聞く→書く→共有する」といった循環プロセスの実践についても解説した。担当者は参加者への配慮なども含め、活動時に集中して尽力しがちであるが、活動後の記録や課題の抽出にも十分な比重を置けるよう様々な配分を試みた

いとのことであった。準備に重点を置き、大人数を動員する特別展示など、従来の美術館活動で主だったものと、こうした教育活動は異質であり、活動の実施に力が注がれてしまい、記録の比重が軽くなる傾向が見られるという問題点を指摘したうえで、活動と同じように記録にも配慮したいとの担当者の感想が述べられた。

【所感】

教育担当職員の活動報告では、指摘される課題や結論がある程度定型な「語り」に収まる例も多くあるだろう。それは組織の内側に目を向けるなら展示業務ほどには理解を得られにくい担当職員の負担であり、目線が外側に向かえば専任の職員がいる他館の教育活動に照らして指摘されてしまう活動の限界性などであろうか。

そうした「語り」からは、教育担当職員の位置づけが相対的なものであり、その職務が学芸員という存在に結果として依存する現状が見えてくるように感じる。たとえば採用時において、いわゆる学芸員はその分野における修士号以上といった学歴要件で作品・資料に対する高い専門性を求められる実情がある。これに比して、教育担当職員は教育活動に対する専門性や経験、組織における専任職員としての位置づけが一般化されているわけではないようである。しかし、作品・資料への専門性は学芸員と同程度に要求される例も多いようだ。このことは、研究会当日の稲庭氏の経歴に対する質疑応答からもうかがえた。現場で拾われた課題についても、館としての対応ではなく担当者が個別に解決するものと捉えられ、ゆえに構造的な問題が存在することさえ等閑視されてきた経緯がこうした質問の背景にあると感じた。

であるならば、欧米などで先行する教育担当職員／エデュケーターという専門職員の形を現状の業務に沿ってイメージする以上に、担当者ではない立場の職員もふくめ、各館の使命とその歴史的経緯を踏まえつつ日々生まれゆく課題の数々を丁寧により共有していくことが意義のあることのように思える。それは、一様ではない教育担当職員の在り方について、概念形成を目指して論じることにもつながるだろう。

今回の研究会では美術館の使命にまつわる議論と実践、とくに教育活動に即して深めてきた同館における課題共有プロセスに着目したいと考え、参加した。

この観点からは、美術館の役割が作品と観賞者の媒介者としての「もの」であり、すなわち両者の対話が個人的、さらには情報発信を含む社会的な対話へと質的变化をとげつつ営まれること、継続的であるためのサポートを担う息の長い存在であること、などの点が強調されたことがとくに印象に残った。現在子どもたちを対象とする教育活動が将来的にどのような意味を持ちうるのか、という長期的な視座における問いかけから、今後のエデュケーターのあ

り方を検討する試みは学習論など主軸の異なる研究ともリンクさせつつ、さらなる議論を深化させる必要があるだろう。

※稲庭氏の発表時のデーターは、許可をいただき下記JMMA関東支部のブログにて閲覧可能です。

JMMA関東支部ブログ

<http://jmmakanto.blogspot.com/>

支部会だより

②北海道支部 平成22年度研修会開催報告

研究フォーラム

魅力ある自前展示技法を学ぶ

— 北海道道南地方の試み —

財団法人北海道開拓の村 中島 宏一

はじめに

本学会北海道支部では、北海道博物館協会（以下、道博協）に協力して毎年「ミュージアム・マネジメント研修会」を開催している。

平成22年度は道博協「道南ブロック博物館施設等連絡協議会」との共催で、江戸期以来ニシン漁と商業港として栄え、往時の遺構を残しながら町並みの再生に取り組んでいる江差町を会場として、去る10月21日（木）と22日（金）の2日間にわたり開催した。

今回の研修会に際し、本支部と同協議会では「博物館の運営力を高める—魅力ある自前展示技法を学ぶ」をテーマに掲げ、博物館運営については予算の削減による経常経費の見直しや人的削減など様々な問題を抱えているなかで、経費をかけなくとも印象が残る展示技法を学ぶ研修会を開催し、あわせてポスターやチラシなどの周知媒体の作成法について学ぶことで、博物館の発信力を高めることを目的として、道内の博物館・美術館に開催を周知した結果、60名を越える参加者が募り、本事業に対する関心の高さを示唆した。



写真1 旧中村家住宅（江差町）¹⁾

1. 展示技術を学ぶ—魅力ある自前展示の方法

本テーマの研究フォーラム（講義とディスカッション）には、講師としてアンツデザイン代表でデザイナーの岡村敬之氏を招聘した。岡村氏は、株式会社丹青社でデザイン業務を担当した後独立、博物館の特別展示や一般企業のショールーム等のデザインを手がけている。今回は、限られた予算や人員のなかで、利用者に受け入れやすい展示手法とコストダウンに特化した展示部材について、実践例を挙げた報告を受けたのでその要旨を報告する。

①展示空間

大型の博物館では、特別展示用にパネル等が設置された空間があるが、特別仕様の展示パネル等を用いることができるが、小規模な施設では玄関や会議室を流用する場合が多く見受けられる。このような場合にどのような空間を演出するかが重要であり、学芸員の技術が問われる。

そこで岡村氏より、「イーゼル」や「単管パイプ」を活用する手法が紹介された。

絵画用に用いられるイーゼルは価格も10,000円程度と比較的安価に入手することが可能で、複数並べて展示することでデザインの効果も期待できる。工事用の単管パイプを利用した展示は自由度が高く、応用性にも利している。後者については、商業用の展示でも多用された時期もあった。さらに、コンパネ（複合材）と木材を組み合わせることで、安価な展示パネルが造作されることも紹介された。



写真2 イーゼル活用例²⁾

②解説パネル・キャプション等

発泡ボードに紙を貼付した手法が一般的に行われているが、時間の経過とともに表面が波打ち見栄えが悪くなるとともに、発泡ボード自体が高価であり、コストを考えると好ましくない。現在入手できるものでは再剥離シートが良法だが、高価で日常的な実用性は低い。ポスターフレームは使い勝手が向上している。アクリル製のサンドパネルは縁が透明であるのでフレームがあるより観覧者にとって見やすいが、コストを考慮すると現時点ではポスターパネルを活用するのが最良である。

資料のネームカードは既存のネームプレートを使用するのが一般的であるが、アクリル板が比較的厚く、サイズも限定されるために使いづらいとの現場

の声がある。そこで、厚紙に出力してスタンド等に貼り付ける手法が自由度を高めており、利用者も見やすい。さらに厚さ0.5mmのアルミ板を使うと市販のカッターで切断できるため、キャプションのサイズが設置する場所に合わせて自由に変形できるので活用しやすい。

③文字の大きさ、フォント、カラーユニバーサルデザイン

利用者と文字情報との距離の定数値から換算して、文字の大きさを示すポイントで表すと1_{ドル}で16P、2_{ドル}で31P、3_{ドル}では49Pとなり、この数値を目安にして解説パネルを製作するとよい。文字のフォントやカラーユニバーサルデザインは弱視者や色弱者に配慮する必要があり、展示手法にもバリアフリーが要求される。

④文字の高さとレイアウト

通常、展示物の設置高は1,350_ミであり、解説パネルを設置する場合には、バリアフリーの観点から展示物より下方に設定するのが望ましい。また、ネームプレートをケース内に設置する場合は基準線を決めて直線的に配置するのが望ましい。

⑤展示物

i 大型資料

資料の保存状況によるが、大型資料を展示する際は直置きという手法を採用する。この場合、カーペットやコンクリート平板を敷いたり、倉庫等で使用する木製のパレットを活用する例も見られる。パレットは自由度があり、仕切り等にも応用が効く。また、この手法は利用者にとっても資料を身近に感じることができる利点もある。

ii 小型資料

小型資料はガラスケース内で展示されるが、会議用長机に白布を使用したうえアクリルケースなどで覆って展示することも可能である。但し、代用のイメージを払拭するには、四方を処理することや白布の一部に展示資料名を印字するなどの工夫が必要である。なお、資料の盗難を危惧する場合はこの手法は用いない。

iii 資料の固定

針金や糸で固定してきたが、タイラップが有効である。本品は使い捨てであるが固定が容易であ

り、作業効率を高めることができる。

iv 映像機器

展示室内で映像を導入する場合はフォトフレームが使用するとよい。価格も1万円前後と安定しており、ソフトにスライドショー機能を取り入れることで、有効な映像展示となる。

⑥照明³⁾

初期投資がまだ高価だがLED照明器具の実用性が高まっており、ランニングコストを考慮すると導入を検討してもよい。例えば、50Wとハロゲン球と14WのLED球を比較すると、単価は前者が2,950円、後者が18,500円に対し、年間ランニングコストは4,290円と706円となる。

2. 平成22年7月にオープンした箱館奉行所

研修会2日目は、フォーラムの会場となった開陽丸記念館（江差町）と上ノ国町の国指定史跡「勝山館跡」、重要文化財「旧笹浪家住宅」等を見学した。



写真3 開陽丸記念館⁴⁾



写真4 旧笹浪家住宅⁵⁾



写真5 箱館奉行所（外観）



写真6 同左内部⁶⁾

ところで、道南地方の中心都市函館市の五稜郭公園内に平成22年7月29日、「箱館奉行所」がオープンした。箱館奉行所は、江戸幕府が蝦夷地開拓の拠点として元治元年（1864）五稜郭の中央に移設、明治4年（1871）に明治政府によって解体されたが、函館市が文化庁と北海道の補助を受けて、平成18年（2006）から復元工事が行われてきた。

復元したのは、奉行の執務室など約1,000平方メートルで総工費は27億円、屋根に敷き詰められた38,000枚の瓦が目を見張る。跡地の発掘から復元まで関わった市立函館博物館館長の田原良信氏によると、本施設の内部展示を企画する際には、発掘調査で出土した遺物や復元過程の映像記録を展示プログラムに採り入れるなど、自前展示にこだわりをもったという。

また、本施設は東北新幹線の新青森延長とともに函館における観光振興にも寄与しており、初年度の入館者数の目標数値が147,000人にもかかわらず、10月末現在で既に150,000人を突破しており、年度末には300,000人を超えるとも言われている。

おわりに

研究フォーラムでは、実践例を数多く取り上げた岡村氏の報告は参加者には新鮮に受け入れられ、ディスカッションでも活発な意見交換が展開され大変好評であった。博物館展示の充実には学芸員の技量とセンス（感性）を証左するものであるが、大・小規模の施設に関わらず、学芸員が展示の更新作業に対して継続的な時間を費やすことができない現実的な問題がある。さらに、展示作業は学芸員が片手間で従事する作業ではなく、昨今の利用者の厳しい視線、高度化してきた学習姿勢に対応しながらも、博物館活動のセールスポイントの一つである展示を充実させ、利用者に受け入れられる博物館づくりに取り組むためには、学芸員個々のスキルだけでは限界があるのも事実である。

ミュージアムマネジメントの観点から、今回報告を受けた事例を実践に移す機会を博物館業務で位置づけていくことが今後の課題と思われる。

注

1) 重要文化財「旧中村家住宅」(江差町)

同住宅が建つ国道227号線に並行する道道（旧国道）約1.1km沿いの地区は、平成元年（1989）に北海道が「歴史を生かす街並み整備モデル地区」に指定し、同8年（1997）から道路の拡張や電線の地中化、家屋や土蔵の保存整備に着手し、8年の歳月をかけて明治から昭和初期をイメージした「いにしえ街道」として再整備した。同地区には旧中村家住宅をはじめとした歴史的建造物が27棟、切り妻屋根など景観整備を施した一般住宅が約130戸ほど建ち並んでいる。

2) 「生涯学習ボランティアメッセ in SAPPORO」(会場：札幌市生涯学習センター) 平成19年2月開催。同事業は施設ボランティアの振興を目的として、財団法人北海道開拓の村と財団法人札幌市生涯学習振興財団との共催で実施した。

3) 岡村氏の報告で紹介されたLED照明の効果

品 名	ハロゲン球	LED球
消費電力	50W	14W
球 寿 命	4,000h	40,000h
器具単価	8,000円	18,500円
ランプ単価	2,950円	
年間交換数	0.6回	0回(16.6年間)
年間ランプ費	1,770円	0円(16.6円)
年間ランニング費	4,290円	706円

*年あたり年300日営業、1日あたり8時間点灯、電気量単価は21円/kwhで計算。

4) 開陽丸記念館

開陽丸は幕末にオランダで建造した幕府軍艦で、戊辰戦争時に軍艦奉行の榎本武揚らが操り活躍したが、明治元年（1868）に江差沖で座礁、沈没。昭和50年（1975）から発掘調査が行われ、大砲5門を含む約35,000点の遺物が引き揚げられている。写真3の開陽丸はオランダに残っていた設計原図をもとに復元された。

5) 重要文化財「旧笹浪家住宅」

19世紀前半、能登屋笹浪家の5代目久右衛門が建てたと伝えられる北海道最古の民家建築で、平成4年（1992）、重要文化財に指定された。平成18年（2006）4月より一般公開されている。

史跡「上之国勝山館跡」

松前氏初代武田信広が1470年頃に築いた山城で、昭和54年（1979）から着手された発掘調査を基に、復元整備されている。同館跡南端に今回見学した「勝山城ガイダンス施設」が設置されている。

6) 箱館奉行所

開館時間が4月から10月までは午前9時から午後6時まで（11月～3月は午前9時から午後5時まで）としたことで、観光客の市内観覧時間を大幅に増加させており、10月末までは閉館時間直前まで観光客の利用が見受けられた。

（北海道支部幹事）

支 部会だより

③近畿支部 合同見学会開催報告

兵庫県立考古博物館見学会報告

京都橘大学 大学院 幸山 綾子

兵庫県立考古博物館の見学会について、以下の通り報告する。

1 開催の趣旨

兵庫県立博物館は2007年10月に開館した新しい考古学専門の博物館です。現在の博物館の世界では決して順風とは言えない中で、新に開館しました。

また、隣接して大中遺跡があり、館の建物の高さを抑え、全体を緑化することにより、史跡公園として整備された「播磨大中国古代の村」と一体化して運用されており、環境との調和をはかった「環境融合博物館」です。博物館には研究・展示を担当する事業部と発掘調査を担当する埋蔵文化財調査部があり、兵庫県における考古学の調査・研究・活用の新しい拠点となっています。新しい博物館ということだけでなく、文化財保護の面などからも様々な意味で興味深い館です。(近畿支部会 井上敏 先生のコメントより)

日 時：2010年11月28日(日) 午前11時より

参加人数：7名

見学先対応者：村上賢治 氏(学習支援課 課長)

2 館の概要

所在地：兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
JR土山駅前には駅の再開発にともなって古代のやぐらに見立てた時計台が設置されている。考古博物館・大中遺跡へは別府鉄道の跡であるであいの道を1キロほど進む。



駅はまちの顔である

①館のテーマ



「過去と未来をつなぐ博物館」：2つの手のシンボルマークは、子供の手をモチーフにした過去を探る手と、未来をつかむ手である。展示や体験学習などの博物館活動を通じて、過去の人類の活動を現代の人々の生活に関連づけ、過去から受け継いだ貴重な歴史文化遺産である遺跡や遺物を、現代の人々に価値あるものとして、未来へ継承していく。(普及活用分野)

「人類の知恵や経験を解き明かす博物館」：遺跡や遺物などの歴史文化遺産を素材として、考古学の方法で、過去の人類の知恵や経験を明らかにする。(調査研究分野)

「地域文化の創造に貢献する博物館」：多様な人材が博物館活動に参加し、人や情報が交流することにより、過去から受け継いだ歴史文化遺産を源とした、豊かな地域文化の創造に貢献する。(交流分野)

②沿革

- | | |
|---------------|---------------------------|
| 2003(平成15)年3月 | 『県立考古博物館(仮称)基本構想』策定 |
| 2004(平成16)年2月 | 『県立考古博物館(仮称)基本計画』策定 |
| 4月 | 文化財室に考古博物館開設準備担当を設置 |
| 2005(平成17)年4月 | 考古学博物館準備担当を考古博物館開設準備室とする。 |
| 11月 | 起工式 |
| 2006(平成18)年4月 | 県立考古博物館開設準備室として文化財室から独立 |
| 2007(平成19)年4月 | 埋蔵文化財調査事務所を埋蔵文化財調査部として統合。 |
| 10月 | 開館 |
| 2009(平成21)年3月 | 博物館法に基づく博物館に登録される。 |

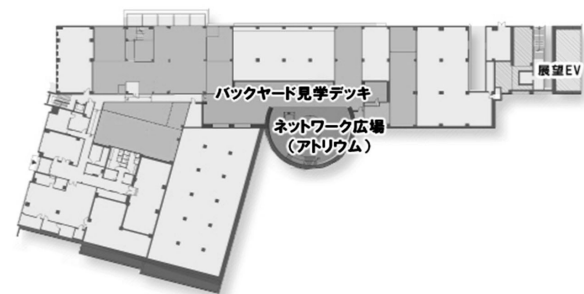
- ③利用者数：2007年度…103,051人、2008年度…
187,452人、2009年度…155,911人
うち、およそ3分の2が子ども。その子どものうち
半数は未就学児である。

3 施設概要

フロア1F



フロアB1F



①バックヤード見学デッキ・収蔵展示 (241m²)



バックヤード見学デッキから見える遺物整理室の様子

バックヤード見学デッキでは、遺物整理室での作業の様子を見学することができる。また、見学ツアーも定期的 to 実施されており、出土品を間近に見ることも可能である。収蔵庫もガラス張りになっており多くの出土品を見ることができる。収蔵展示のコーナーは、収蔵棚の中に収蔵されているようすが分かるようになっている。



収蔵展示のコーナー

考古博物館に埋蔵文化財調査部が設置されており、県内の発掘調査の実施をはじめ、出土品の整理、保存処理、収蔵・保管、調査報告書の発行を行っている。

②ネットワークひろば (394m²)

兵庫県内の遺跡や考古系博物館の情報を提供している。映像ブースが設置されている。また、クリスマスコンサートなど、イベントを行うこともある。

③考古学情報プラザ (188m²)

図書や、過去の展覧会図録の閲覧、データベースの検索、考古学のゲームも楽しむことができる。レファレンスコーナーも設置されている。展示室での学びを深める場としても活用されている。

④体験展示室 (276m²)

大中遺跡の一部(住居跡)を移設保存し展示している。発掘に用いる道具類を紹介し現場の雰囲気を体感できる。発掘ひろばでは、長靴・スコップ・手袋が備えてあり、砂場に埋められた遺物のレプリカを発掘する体験ができる。長靴など用具は大人用のものも用意されている。

現代の生活と古代の生活の比較があり、子どもたちが古代の生活を楽しく学べる。

⑤テーマ展示室 (822m²)

「人(私たちの由来)」「環境(自然とともに)」「社会(国のなりたち)」「交流(みち・であい)」にテーマ分けされている。

「人」では、縄文人・弥生人・古墳人の墓、人骨からそれぞれの特徴を学ぶことができる。骨から分かること、人の変化についても学べる。また、明石原人についても触れている。人骨を怖がる子供も多い



発掘現場が再現されている様子

ようだ。骨だけでなく復元されたそれぞれの顔の模型もある。ハンズオンは、縄文人・弥生人と自分の顔を比べてみるツールなどがある。

「環境」では、狩りや生活の道具の変遷や食生活、信仰について学べる。兵庫県は銅鐸の出土地域として知られているが、あまり詳しく紹介されていなかったように思われる。ジオラマによる展示が中心であった。このコーナーでは、銅鐸を鳴らすことができる。

「社会」では、ムラが争いを繰り返しながらクニへと成長することが分かる。使用する道具の変遷から、石から鉄になったことで、戦いの道具も変わっていくことが分かる。兵庫県内の砦跡、王墓の紹介がある。ジオラマは、雲部車塚古墳の竪穴式石室の再現がある。剣や埴輪、アクセサリーなど副葬品の紹介。ハンズオンは石棺の組み立て、古墳の構造が分かるツールがある。

「交流」では、主に縄文時代から古墳時代において、兵庫県内各地と日本各地との交流の様子を学ぶことができる。瓦や須恵器の制作の様子などが分かる。兵庫の港が貿易の重要地点であったことが分かる。ハンズオンは、すごろくや、瓦屋根の葺き方などツールがある。また、時間限定のイベントであるが、復元された石棺の中に入ったり復元された古代船に乗ったりすることができる。この船は実際に海に浮かべる実験をしたことがあるそうだ。さらに、貫頭衣、古代の役人・女官、巫女などの衣装を着る体験もできる。サイズは子供用・大人用それぞれある。

体験展示室、テーマ展示室には、通常監視員と呼ばれる係員はいないが、発掘、衣装や船などの体験コーナーでは係員が説明や体験の補助をしてくれて、ボランティアや学芸員との交流ができる場となっている。



展示室入口にはイベントの案内がある

⑥特別展示室（204m²）

特別展「茶すり山古墳 ―巨大円墳に眠る但馬の王―」を開催していた。朝来市にある茶すり山古墳は近畿地方最大の円墳である。2001年度から2002年度にかけて発掘調査が行われ以来、初めての展示であった。王墓の副葬品が主な展示であった。会期中は毎週土曜日に講演会が行われていた。テーマ展示室・体験展示室とは違い、ハンズオンはない。子供向けのワークショップも行われたようだ。見学会当日は学芸員によるギャラリートークが行われていた。

⑦屋外

博物館の屋上階へは、建物の中のエレベーターや外の階段から上がることができる。

屋根部分、壁面の一部は緑化されており、屋上庭園となっている。屋上階からは、狐狸ヶ池や播磨大中遺跡公園を眺めることができる。

4 秋まつり

「考古博古代体験秋まつり」は、隣接する史跡公園「播磨大中国古代の村」で、開館以来3回行われている考古博物館主催のイベントである。秋まつりとしての開催は2008年からである。古代体験とあるように、埴輪や勾玉などの制作体験や衣装を着る体験など様々な体験メニューが用意されている。無料で楽しめるもの、幼児でも楽しめるものもある。2010年の場合、体験ブースは、兵庫県内の博物館、埋蔵文化財センターだけでなく、九州国立博物館、むきばんだ史跡公園、徳島県埋蔵文化財センターなど西日本各地の考古学系の施設や、NPO法人・工務店など29種類用意された。また飲食ブースでは、古代米のパンや鹿肉料理など5種類が用意された。展示コーナーでは、県立高校の授業での成果や、考古博物館のプロジェクト

クトについて発表された。

5 ボランティア・体験学習室

考古学博物館では、博物館ボランティアが積極的に活動している。「考古楽倶楽部」というボランティアグループであり、博物館の開館の5年前（2002年）から活動を始めた。展示室内での解説だけでなく、体験学習やイベントでも中心的な役割を果たしている。体験学習室では、勾玉づくりや石包丁づくりの補助、展示室では衣装体験、船・石棺体験の補助をしている。また、播磨大中遺跡の解説や、復元された竪穴住居内での火おこし体験などを行う。「考古博物館体験秋まつり」でもボランティアグループとして、博物館とは別に体験ブースを出している。なお、ボランティアの養成は博物館が行っており、全20回の講座を受ける。

6 ミュージアムショップ

株式会社神戸戸月堂による運営である。グッズ・書籍販売の他、カフェも併設されている。オリジナルグッズとして大中遺跡のマスコットキャラクター（播磨町のマスコットキャラクター）や考古博物館のシンボルマークの描かれたゴーフルなどがある。また、展覧会の図録、体験学習の勾玉づくりなどのキットの販売をミュージアムショップで行っている。展覧会の図録は、部数などをミュージアムショップで決めているため、会期中に売り切れてしまうこともある。カフェからは遺跡公園を眺めることができる。お弁当やサンドイッチのほか、ぜんざいなど喫茶メニューがある。来館者は子どもが多いが、子供向けのメニューというのは特に用意されていない。散歩途中にカフェに寄るといふ人もいようだ。

7 播磨大中遺跡

播磨大中遺跡は、1962年に地元の中学3年生によって発見された弥生時代後期の集落である。印南野台地の南端に位置する。甕、高坏、壺、鉢や、イイダコのタコツボも出土した。住居跡は2本柱・4本柱・5本柱・6本柱など様々な住居跡が確認されている。発見された頃は農地が宅地へと開発が進められていた時期でもあり、播磨大中遺跡も開発の危機に陥るが、地元市民の保存運動もおこり、保存されてきた。そして、1967年に国指定史跡となり、その後「大中遺跡公園」として整備されてきた。7棟の住居の復元、竪穴住居跡の露出展示、クヌギ・シイなどのどんぐり類やヤマモモ、クリなどが植栽され

ている。播磨大中遺跡の広さは約70,000m²、遺跡公園の広さは44,000m²となっている。

復元された竪穴住居内で実際にたき火をして、住居から煙が出る様子などをボランティアが説明する日もある。

8 播磨町郷土資料館

播磨町大中1丁目1番2号。考古博物館や播磨大中遺跡に隣接する。入館は無料。1985年に開館した。設立のきっかけは、大中遺跡の発見であるが、郷土資料館として町の歴史・民俗・産業の資料を収集、保管、展示している。大中遺跡の出土品は、はじめ郷土資料館に保管された。発掘を進めるにつれて、考古博物館でも出土品の収蔵をするようになった。播磨大中遺跡の出土品のほかに、愛宕塚古墳の出土品や阿閑神社資料、別府鉄道の資料などがある。歴史講座や文化財教室などの普及活動も行っている。

また、考古博物館の「秋まつり」とは別に播磨町の「大中遺跡まつり」を開催する。1991年から始まり地域の人による弥生パレードやステージでのイベントが行われる。

まとめ

村上さんがおっしゃっていたことではあるが、博物館で大切にしていることはもてなす気持ちということであった。ボランティアだけでなく、学芸員なども展示室で見かけ積極的に体験に関わってくるので、話しながら理解も深めることができる。展示は小学6年生に理解できる内容ということであるが、実際の来館者は未就学児が多い。遊びながら考古学に触れ・学ぶことができる博物館で、考古学初心者の市民向け、子ども向けの博物館と言える。幼児向けの体験プログラムやハンズオンのツールの開発を行っており、幼児の受け入れ体制を整えようとしている。

兵庫県は銅鐸の出土数が多いのだが、出土した銅鐸に関する情報は展示からは詳しくは分からなかった。本格的に調べようとする時は考古学情報プラザを利用することになるだろう。

播磨大中遺跡は、発掘調査に地元の人や中高生なども参加した経緯があり、地元の人々によって親しまれ、また町のシンボルとして存在してきた。大中遺跡公園や郷土資料館は無料で入れるゾーンであり、考古博物館も無料で楽しめる部分の動線は分かりやすくなっている。また、市民に開かれる講堂などがある。また、考古博物館ではボランティアの人々が

積極的に活動をしており、市民と博物館との協力体制が整っているように感じた。

郷土博物館と考古博物館では、播磨町のマスコットである「いせき君」と「やよいちゃん」を見かけることができる。秋まつりと遺跡まつりの同時開催なども、連携ができていているように感じる。

埋蔵文化財センターの機能と博物館の機能が同じ場所にあることで、保管や研究、普及活動の場がとても近く、市民が埋蔵文化財行政に親しみやすくなっているように感じる。

展示室では大型のジオラマが多いので、展示替えが難しい。しかし、ハンズオンのツールなどを替えていくことで展示との関わり方に変化がでてくると考える。

これからも市民に親しまれる博物館として発展していくことを願っている。

参考文献

- 『Past & Future 兵庫県立考古博物館コンセプトブック』2008. 兵庫県立考古博物館編集・発行
- 『平成22(2010)年度要覧』兵庫県立考古博物館
- 第3回考古博古代体験秋まつり参加団体資料
- 公的施設運営評価調書(総合評価)2009年度. 兵庫県
- 兵庫県立考古博物館ホームページ
- <http://www.hyogo-koukohaku.jp>
- (本文中図出所: 博物館フロアガイド、シンボルマーク)
- 『弥生時代の子どもたち — 大中遺跡の51の質問に答える —』2007. 播磨町郷土資料館編集・発行
- 播磨町ホームページ <http://www.town.harima.lg.jp>

支部だより

④九州支部研究会

九州産業大学美術館 学芸員 松友知香子

日時: 平成22年9月4日(土)

12時30分～17時20分

場所: 熊本市現代美術館5階アートロフト

参加対象者: JMMA会員及び一般の方々

参加費: 無料

参加者: 30名

第1部: 九州支部総会 (12:30～13:00)

支部総会では、平成21年度事業報告と平成22年度の予算、事業計画、会員異動などが報告され、今後の九州支部の活動に関して、活発な意見交換が行われた。

第2部: 「子ども、教師、学校と美術館をつなぐ活動 — 互いに紡ぎ合う連携活動をめざして」

(13:10～14:10)

講師: 熊本県立美術館 主任主事 犬童 昭久 氏

熊本県における美術館と学校の連携について、熊本県立美術館の事例を犬童氏より紹介していただいた。熊本県立美術館では、同美術館でボランティア活動に従事していた教師が結成するボランティア集

団「わーくしょっぷの会」が中核となって、子どものための美術講座や展覧会の企画を行っている。同会は、平成7年に、熊本県内の小中学校および高等学校と特別支援学校の教諭をメンバーとする5名でスタートし、現在(平成22年度)の構成員は、17名にのぼるという。この組織の目標は、美術館と学校と家庭を三本柱として信頼関係を築き、地域の子どもたちの感じ方や考え方を育んでいくことにある。熊本県立美術館の普及活動は、この「わーくしょっぷの会」のメンバーが中軸となり、さらに主婦を中心とする美術館ボランティア(約40名)と教育関係者が協力し合って、①アウトリーチ活動(出前授業、スクールミュージアム、教育用資料貸し出し)、②学習支援事業(子ども美術館、学校からの団体観覧の対応、ナイストライの受け入れ)などを展開している。

地域との教育関係者と美術館の長年に渡る地道な活動によって、現在では学校と美術館のそれぞれの視点を取り入れた活動が可能となり、また教師と学芸員を結ぶコミュニティの場が生成されている。

こういった活動を支える体制は、大きく3つに区分される。まず①子ども向けの諸企画を担当し、フ

ァシリテータを務める「わーくしょっぷの会」が、教育普及活動における「コア・グループ」となる。②その企画を受けて、コーディネーター役を担当するのが美術館の職員や学芸員を中心とする「子ども美術館」であり、③美術館ボランティアは、「アクティブ・グループ」として、教育普及活動を多面的に支える役割を果たしている。さらにこの活動をバックアップするのが、熊本の小学校教諭からなる④「図工サークルの会」である。

続いて犬童氏より、具体的な活動例が2つほど紹介された。一つは学校へ出かけていって、学校教師と美術館の職員が共同で授業を企画、実践する「出前授業」である。この活動のポイントの一つは、実物の芸術作品を学校へ持って行くことであり、「浜田知明鑑賞授業プログラム」が紹介された。

この事例は、熊本県立美術館に、郷土の版画家浜田知明の作品160点が教育活用目的で寄贈されたことを機にスタートした、県下の学校の教師が参加する作品鑑賞プログラムと教材教具の開発である。

低学年のためには、浜田知明の作品『アレレ…』(1974年)が採用された。この版画は、タイトルが示唆する通り、目や腕などがカリカチュア的に表象化された作品である。子どもたちは、まずクイズ形式でさまざまな「様子ことば(プンブン、ワクワクなど)」の身体的な理解を試みる。次に作品『アレレ…』のスライドを子どもたちに提示し、特徴的な仕草を真似させて、そのときの身体感覚を言葉で追認識させる。この段階に至って、子どもたちに同作品のタイトルが初めて告げられ、そして本物の作品鑑賞に移る。作品を間近で見ながら、子どもたちは美術館の職員から解説を聞くというプログラムである。そのほか中学年のためには、同氏の作品『噂』(1961年)を用いた「不思議の世界へ レッツゴー」、高学年のためには、作品『ボタンB』(1988年)を用いた「このボタン 何のボタン?」が考案された。こういった一連の鑑賞授業を通じて、教育教具と本物の版画作品をセットにした、鑑賞授業教材セットが開発されたという。

2例目には、上述の「わーくしょっぷの会」のネットワークを活かし、平成18年の熊本県立美術館30周年記念事業の一環として、同館が所蔵する浜田知明、シャガール、東山魁夷らの版画作品と、触察できる宮崎準之介の立体作品を学校へ持ち込み、学校を1日美術館にする「スクールミュージアム」の例が紹介された。こういった試みは、幼少期の美術鑑賞教育を充実させることによって、将来へと持続す

る美術愛好の芽が育まれるであろうという教育観に由来している。4月に県内の学校に募集要項を配布し、地域性を考慮して開催校を選定し、9月から12月にかけて、県内の10校程度で1日間、実施された。具体的な時間については、開催校と協議し、作品への紫外線防止策や、盗難等のセキュリティの面も検討した上で、体育館や教室が使用された。作品展示中は、美術館の職員が常時在室し、必要に応じてギャラリートークが行われたという。

子どもと芸術作品との密接な関わりが生まれる場で、特に重視されたのが、〈語り〉と〈振り返り〉のフィードバックであるという。ここで言う「語り」とは、子どもたちにとっては、ほとんど予備知識のない芸術作品に対する〈意味づけ〉の役割を果たす。次に子どもたちには、作品を鑑賞して発見したことを発表する場が与えられ、参加者とのディスカッションを通して、最初の直感的ともいえるべき〈意味づけ〉の相対化が促され、高次の鑑賞段階へと移行する可能性が開かれる。こういった試みは、毎年10校ほどで開催され、過去4年間で、参加者は2万人を計上している。実物作品を館外で展示することに起因する様々な諸制約(時間・空間・予算)があるものの、子ども・学校関係者・保護者の三者にとって、かけがえのない経験になったという声が多数寄せられているようだ。今後の課題としては、諸制約をいかに効果的にクリアし、限定的なサービスを地域に普及させるかである。



(2) ディスカッション (14:30~16:00)

コメント① 熊本県における美術館と学校の連携を支える層の厚さと熱意を改めて認識できる発表であった。

コメント② 「スクールミュージアム」(所蔵する芸術作品を学校で展示する)に関する作品選定や安全管理について

→近隣に美術館のない学校側の強い要望を受けて、

学校と美術館の協力の下に実現された企画。作品の管理については、これまで深刻な被害はないが、今後も十分な配慮が求められる。

コメント③ 「浜田知明鑑賞授業プログラム」における鑑賞教育のあり方について

→学校教師であった永野一成氏の浜田コレクションが美術館に収蔵され、鑑賞授業の教材に採用したという経緯がある。浜田知明の作品は、人間の本質を鋭く究明するものが多いため、子どもの成長段階に応じたプログラムの開発が求められる。



ロッパの写真資料などで検証していく。最後にへるんさんの感性の再解釈が試みられ、彼の異邦人としての経験や『怪談』のベースとなった日本の民間伝承をテーマにした、現代日本を代表するアーティスト9人の作品が展示されていた。会場を俯瞰すると、作品の制作年やジャンルは多岐にわたっているが、いずれの作品も〈へるんさん〉の内面へと集約されていき、とても見応えのある興味深い展覧会であった。同展を企画し、案内してくださった富澤氏にお礼申し上げます。

最後に

ガイドツアーの後に、美術館内のカフェ・レガロにて懇親会が催され、講演会について意見交換や参加者の交流の場となった。この研修会には、九州産業大学（福岡）で学芸員資格取得をめざす学生も多数参加し、美術館における実践的な取り組みに大いに刺激を受けたようであった。



(3) 熊本市現代美術館見学会（16：20～17：20）

ディスカッションの後に、熊本市現代美術館で開催中の展覧会「へるんさんの秘めごと展」で、学芸員富澤治子氏によるガイドが行われた。この場を借りて同展を総括すると、へるんさん（小泉八雲／ラフカディオ・ハーン）は、1891年から1894年の3年間、熊本県に滞在したが、この展覧会では、同地に残る彼の遺品を手がかりにして、まずは当時の日本の生活風景を浮かび上がらせる。そして彼の文学作品（『怪談』の「雪女」や「耳なし芳一」など）の根底にある人間の〈心の闇〉への関心が、洋の東西を問わず、同時代の人々に共通していたことを、〈妖怪〉を描いた絵画や〈霊魂〉を撮影したというヨー

i n f o r m a t i o n

◆文献寄贈のお知らせ

- ・東海大学出版会
『新版水族館学 水族館の発展に期待をこめて』
- ・京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター
『2009年度アート・コミュニケーションプロジェクト報告書』
- ・独立行政法人国立科学博物館（研究代表者）亀井修氏
『平成19年～22年度科学研究費補助金研究成果報告書 小学校教員養成課程を支援する科学技術体験プログラム実施システムの研究開発』

u o ! t e w i o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

阿出川 潔 杉並区立郷土博物館
香林 勉 戸田市立郷土博物館
三島美佐子 九州大学

【学生会員】

畔田 暁子 筑波大学
竹本 卓 法政大学ビジネススクール
(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・マネージメント学会法人会員 (2011年3月現在)

株式会社アートプリントジャパン
アクティオ株式会社
財団法人阿蘇火山博物館 久木文化財団
株式会社江ノ島マリナー
財団法人科学技術広報財団 日本科学未来館 運営事業本部
カロラータ株式会社
交通科学博物館
財団法人竹中大工道具館
公益財団法人 多摩市文化振興財団
株式会社丹青研究所
株式会社丹青社
つくば科学万博記念財団
東京家政学院大学
東京家政大学文学部心理教育学科

株式会社トータルメディア開発研究所
内藤記念くすり博物館
長崎歴史文化博物館
株式会社西尾製作所
株式会社乃村工藝社
パナソニック電工株式会社 パナソニック電工汐留ミュージアム
株式会社文化環境研究所
株式会社文化総合研究所
ミュージアムパーク茨城県自然博物館
財団法人山梨県青少年協会（山梨県立科学館）
UCCコーヒー博物館
早稲田システム開発株式会社

(五十音順・敬称略)